

〈近代〉のもつユートピア的意義を重視し、評価し直す

実践的な「思想」の構築へのスプリングボード作りを目指した書物

恒木健太郎

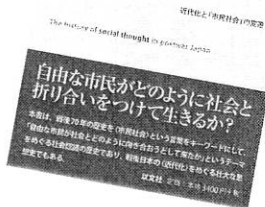
小野寺研太 著

戦後日本の社会思想史

近代化と「市民社会」の変遷
6・20刊 四六判352頁 本体3400円
以文社

小野寺 研太
Ono Teruhiro

戦後日本の社会思想史



本書の対象とした「市民社会」という言葉は、著者が「日本」の市民社会論→講座派に由来→前近代性批判→近代の「評価が甘い」というチャート式で半ば自虐的に説明しているほど簡単に処理される対象と化している。そうした傾向が明白になっていった2000年代に大学院に入った

と書かれる著者がこのテーマで二冊の本を物した勇氣に、同じく戦後日本の社会思想史研究の一端にかかわっている

と愛情が確保できるような、広範囲にわたる共同性の原理の探求を、「市民社会」言説の最大公約数的な共通性として提示する本書は、「市民社会」のなかに込められた〈近代〉像のユートピア性に寄り添う姿勢を貫いている。大河内一男、高島善哉、内田義彦、松下圭一、平田清明、望月清司。彼らの描いた〈近代〉像

の作為性を「確信犯」として描き、その「虚像」が時代の要請でもあったことを著者は力説する。つまり、近代の実に相に迫った指摘をいくら行なっても、「市民社会」の言葉がもつ社会科学の諸分野を横断する社会認識の枠組みとしての「虚像」の思想的意義は変わらない、という主張が

すべき理念としての〈近代〉のもつユートピア的意義ではなからうか。近代とは実際のところどうだったか、という実証主義の姿勢に潜む〈近代〉の証書の恣意性を隠蔽する体質を批判するために、戦後思想の近代主義を価値観の明確化という点で評価し直すという

の区別を紹介する。いわゆる「関係のルール」(市民社会)という二つの区別を紹介する。いわゆる「関係のルール」(市民社会)という二つの区別を紹介する。いわゆる「関係のルール」(市民社会)という二つの区別を紹介する。

「関係のルール」という「形式」として受容されることにある。見田(真木)の議論からこのような可能性を抽出する。著者の根底には、平田清明が芥川龍之介から引いていた「理想」の構築へのスプリングボード作りを目指した書物として読まれるべきであろう。

著者は、「市民社会」をめぐる上記のような図式的裁断に抵抗せんとする。人間集団がそれぞれの異質性を保ちながら、それでいて生存と尊厳と愛情が確保できるような、

文化的生活「確信犯」として価値観も、国際社会が広く受け入れている「常識」、正確

の議論を本書に挿入してきている。見田(真木)の議論は、従来の市民社会論者とされる

人々のものとは異質であり、この系列に彼が並ぶのは評者からすると違和感がある。しかし、それが著者の意図なのであろう。著者は彼の「関係のユートピア」(交響するコミュニケーション)と「関係のルール」(市民社会)という二つの区別を紹介する。いわゆる「関係のルール」(市民社会)という二つの区別を紹介する。

「関係のルール」という「形式」として受容されることにある。見田(真木)の議論からこのような可能性を抽出する。著者の根底には、平田清明が芥川龍之介から引いていた「理想」の構築へのスプリングボード作りを目指した書物として読まれるべきであろう。

「関係のルール」という「形式」として受容されることにある。見田(真木)の議論からこのような可能性を抽出する。著者の根底には、平田清明が芥川龍之介から引いていた「理想」の構築へのスプリングボード作りを目指した書物として読まれるべきであろう。

(専修大学経済学部講師)